

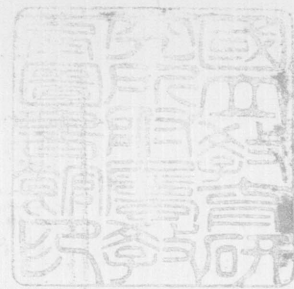
新
解
式

國
文
法
提
要



K220.82

75



緒言

一、本書は簡明なる圖表を用ひて、日本文法を解説し、以て中等諸學校の教科用參考用又は高等諸學校の入學試驗、小學校教員檢定試驗等を受くる者の自習用に供せむとす。

二、文法は讀書作文の際實地について練習せざれば、興味を感ずること少く随つて理會し記憶し應用すること難し。たとひ文典に載せたる幾十百の規則を諳んじ、幾百千の例題を解すとも、畢竟畑水練たるを免れざるなり。然るに従來の文法教科書は、概ね卷數多く、携帶參照に不便なるを以て、自ら講讀作文との聯絡を疎ならしめ、又反復練習の機會を失はしむること尠からず。且其の内容も亦煩瑣に失せるを以て、教ふる者は運用の自由を拘束せられ、學ぶ者は要領の把握に困しみ、遂には共に文法を厄介物視するに至れり。本書は此等の弊害を除却せむが爲に、種々の工夫を凝したり。

三本書所載の圖表は(一頁二頁一六頁の三表を除くの外悉く新案にして、特に語脈解剖及文の成分の解剖に於ける特殊の方式は、立案者の苦心の餘に出て、數年來實地に經驗して、便益尠からざるを認めたるものなり。

語句の結合分解を説くは、文の構成解剖を教ふる準備として必要なるのみならず、講讀作文の教授上に應用して多大の便益あるものなり。從來の文法書は之を等閑にせしが、本書は特に意を此に致し、本居春庭翁、權田直助翁等の語脈解剖圖式に基づきて、簡便なる方案を立てたり。文の成分の解剖圖式は、近時文法家の工夫によりて、枝式、棒式、括弧式、十字式等種々案出せられ、たれども、何れも黑板に書くに便ならず、且成分の顛倒せる文を解剖したる場合に原文のまゝに讀下するを得ざる不便あるを以て、本書には、棚式解剖法を立案したり。

四、文法の術語の一定せられむことは、國語教授に與かる者の齊しく翹望する所なり。本書は、姑く諸文法家の用語に就いて最も穩當なるものを採り、以て統一の機運の到るを俟つ。

五、本書は、簡約を旨としたれども、序を逐ひて研究し、讀書の際實地に参照して練習せば、獨習者にとりても容易に理會し得る様意を用ひたり。

明治四十四年五月

國語教授法研究會

新式
表解

國文法提要

目次

◎九品詞定義一覽	一
◎九品詞語例	二附
◎代名詞分類表	三、四
◎體言と體言との連結	五
◎體言と用言との連結	六
◎語脈解剖の例(一)	七
◎文	八
◎動詞の分類	九
◎五十音圖の上に於ける正格動詞の語尾	一〇
◎動詞語尾變化表	一〇附

○上下一段活變格活語彙	一一
○上一段活及左變活の合成語の例	一二
○四段活及上下二段活語例(附活用識別法)	一三、四、五
○形容詞語尾變化表	一六
○口語用言語尾變化表	一六附
○形容動詞	一七
○形容動詞語尾變化表	一八
○助動詞表 第一	一八附
○助動詞表 第二	一八附
○時の助動詞組合せの表	一九
○動詞と受身使役助動詞との組合せ	二〇
○助動詞として用ひらゝることある動詞の例	二一
○動詞が助詞と約合して一語の如く取扱はるゝ例	二二

○助動詞相互の連續	二三
○助動詞についての注意事項	二四
○や行わ行だ行活用動詞語彙	二五
○用言の語尾に於ける音便	二六
○用言を體言として取扱ふ例	二七
○用言句を體言句として取扱ふ例	二八
○文を體言句として取扱ふ例	二八
○用言と體言との連結(連體法)	二九
○語脈解剖の例(二)	三〇
○連用法による用言の連結	三一
○接續助詞による用言の連結	三二
○中止法による用言の連結	三二
○語脈解剖の例(三)	三四

◎副詞と副詞との連結	三五
○副詞と用言との連結	三五
○語脈解剖の例(四)	三六
◎接續詞を用ひたる體言句、用言句及文	三七
◎助詞分類表	三八
○助詞相互の連續	三九
○助詞使用上の注意事項	四〇
○ばばともども所屬辨別練習表	四一、二三
◎熟語及疊語の例	四四
◎品詞轉成の例	四五
◎接頭語及接尾語の例	四六
◎文の成分	四七
○文の種類	四八

○文の成分の顛倒及省略	四八
○單文の例及其解剖	四九
○複文の例及其解剖	五〇
○重文の例及其解剖	五一
○文の成分の解剖についての注意	五二
◎文の終結(其の一、用言にて終結する者)	五三、四
○係り結び	五三、四
○文の終結(其の二)	五五
○文の終結(其の三)	五六
◎助動詞一覽表	五六附
◎助詞一覽表	五六附

目次(終)

五 十 音 圖

(平假名)

わ行	ら行	や行	ま行	は行	な行	た行	さ行	か行	あ行	
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	あ段
ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い	い段
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	う段
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	え段
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	お段

(片假名)

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
ヰ	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ

注意 五十音圖ハ縦ノ行モ横ノ段モ自在ニ讀誦シ得ルニ至ルヲ要ス。

九品詞定義一覽

體名詞	言代名詞	用動詞	言形容詞	副詞	接續詞	感動詞	助詞
事物の名稱をあらはす語なり。	事物の名稱の代りに用ふる語なり。	事物の動作をあらはす語なり。	動詞の下に附屬して意味を補ふ語なり。	事物の状態をあらはす語なり。	動詞、形容詞(又は他の副詞)の上に副ひて、其の意味を限定する語なり。	語句、文章を接續する語なり。	感動したる時思はず發する語なり。
						他の品詞に附屬して、語句の連絡を助け、又は意味を添ふる語なり。	

注意一、

事物の數、又は數の順序をあらはす語をも名詞とす。(或は之を名詞と區別して數詞と名づくることもあり。)

注意二、

事物の存在をあらはす語の有りは動詞の中に入れ、其の存在せざるをあらはす語の無しは形容詞の中に入る。

注意三、

名詞、代名詞を總稱して體言といふ。體言は其の下にが、の、に、を、と、へ、より、まで、等の助詞を附屬せしめ得るものなり。

注意四、

動詞(附屬したる助動詞をも含む)形容詞を總稱して用言といふ。用言は語尾活用を有するものなり。

九品詞語

言體

名詞	代名詞
日月、山川、人、犬、日本、富士山、楠正成、櫻、菊、風、雪、春、秋、心、夢、表、裏、白、黑、長、短、廣、狭、忠義、孝行、勉強、運動、一、十、百、千、第三、五番、七圓、八石、	我、私、小生、僕、汝、君、貴兄、これ、それ、かれ、ここ、そこ、かしこ、こち、そち、あち、

言用

動詞	助動詞 (動詞ニツク)	形容詞
讀む、書く、起く、寝ぬ、立つ、走る、見る、着る、榮ゆ、衰ふ、往ぬ、死ぬ、來、爲、論ず、説明す、運動す、勉強す、有、り、	る、らる、す、さす、しむ、たり、けり、き、べし、なり、ず、	善し、惡し、清し、美し、白し、赤し、圓し、長し、苦し、樂し、重々し、無し、

副詞(用言ニツク)

最、甚、いと、げに、能く、僅に、殆、頗、遙に、慥に、必、豈、亦、願はくは、

注意四、

しめ得るものなり。
 動詞(附屬したる助動詞をも含む)形容詞を總稱して用言といふ。
 用言は語尾活用を有するものなり。

九品詞語例

言 體		言 用		言 用		言 用		言 用		言 用	
代名詞	名詞	動詞	形容詞	助動詞	副詞	接續詞	感動詞	助詞	助詞	助詞	助詞
我、私、小生、僕、汝、君、貴兄、これ、それ、かれ、ここ、そこ、かしこ、こち、そち、あち、	日、月、山、川、人、犬、日本、富士山、楠正成、櫻、菊、風、雪、春、秋、心、夢、表、裏、白、黒、長さ、廣さ、忠義、孝行、勉強、運動、一、十、百、千、第三、五番、七圓、八石、	讀む、書く、起く、寝ぬ、立つ、走る、見る、着る、榮ゆ、衰ふ、往ぬ、死ぬ、來、爲、論ず、説明す、運動す、勉強す、有、り、	善し、惡し、清し、美し、白し、赤し、圓し、長し、苦し、樂し、重々し、無し、	る、らる、す、さす、しむ、たり、けり、き、べし、なり、ず、	最、甚、いと、げに、能く、僅に、殆、頗、遙に、慥に、必、豈、亦、願はくは、	又、及、並に、或は、さて、而して、斯て、さらば、故に、加之、但し、	あゝ、あな、あら、あはれ、あはや、いで、いでや、いざ、いざく、すは、や、やよ、さても、さてく、	が、の、に、を、と、へ、より、まで、……… (關係助詞) ば、ど、ども、とも、て、で、つゝ、……… (接續助詞) は、も、ぞ、なむ、こそ、のみ、や、か、……… (添意助詞) かな、かし、や、よ、……… (感歎助詞)	が、の、に、を、と、へ、より、まで、……… (關係助詞) ば、ど、ども、とも、て、で、つゝ、……… (接續助詞) は、も、ぞ、なむ、こそ、のみ、や、か、……… (添意助詞) かな、かし、や、よ、……… (感歎助詞)	が、の、に、を、と、へ、より、まで、……… (關係助詞) ば、ど、ども、とも、て、で、つゝ、……… (接續助詞) は、も、ぞ、なむ、こそ、のみ、や、か、……… (添意助詞) かな、かし、や、よ、……… (感歎助詞)	が、の、に、を、と、へ、より、まで、……… (關係助詞) ば、ど、ども、とも、て、で、つゝ、……… (接續助詞) は、も、ぞ、なむ、こそ、のみ、や、か、……… (添意助詞) かな、かし、や、よ、……… (感歎助詞)

代名詞分類表

◎代名詞
人代名詞
 指示代名詞

○人代名詞

自稱 (第一人稱)	對稱 (第二人稱)	他稱 (第三人稱)	不定稱
われ、わ、 (我)	なんぢ、 なれ、な、 (汝)	かれ、か、 (彼)	たれ、た、 (誰)

(欄内の餘白に類語を記入すべし)

○指示代名詞

	近 稱	中 稱	遠 稱	不 定 稱
事物	これ、こ、(此)	それ、そ、(其)	かれ、か、 あれ、あ、(彼)	いづれ、 なに、(何)
地位	こ、	そこ、	かしこ、 あしこ、	いづこ、 いづく、
方向	こち、 こなた、	そち、 そなた、	あち、 あなた、 かなた、	いづち、 いづかた、

(指示代名詞にして人代名詞に用ひらるゝ者あり。
そは何れの語にして、如何なる場合なるか。)

體言と體言との連結

體言はがの、と等の關係助詞によりて、他の體言と連結して體言句を作る。

○君が代	○攝津の湊川
○天が下	○ほまれの討死
○我等が同胞	○喜びのきはみ
○梅が香	○陸軍と海軍と
○櫻の花	○赤と白と

○句とは體言、用言及副詞が二個以上正當に連結したるものをいふ。
○句が體言にて終るときは體言句と名づく。體言句は文章中に於て、一個の體言と同様に取扱ふことを得。

體言と用言との連結

體言はを、に、と、へ、より、まで、等の關係助詞によりて、用言と連結して用言句を作る。

○本を讀む
○國を去る
○師に問ふ
○山に近し
○友と語る
○これと定む

○前へ進む
○東へ向ふ
○人より受く
○山より高し
○家まで送る
○東京まで行く

○句が用言にて終るときは之を用言句と名づく。用言句は文章中に於て、一個の用言と同様に取扱ふことを得

語脈解剖の例 一、

○友に寫眞を贈る
○水を湯となす
○人を東京へ遣す
○京都より東京までゆく

○峯の松が枝に棲む
○筆と紙とを机の上に置く
○わが荷物を郷里へ發送す

○語と語との關係を明にして其の脈絡を知ることが、文章を正しく解するにも、正しく作るにも、極めて必要なことなり。

文

○體言(又は體言句)の下に、其の事物の動作狀態を叙述する用言(又は用言句)を置けば、一の纏りたる思想をいひあらはすものとなる。之を名づけて文といふ。

主 部		叙 述 部
○	花	咲く。
○	月	清し。
○	鶴	峰の松が枝に棲む。
○	父母の恩は	山より高し。
○	我は	我が荷物を郷里へ發送したり。
○	太郎と次郎とは	筆と紙とを机の上に置けり。

動詞の分類

○動詞を性質上より分類する時は、自動詞、他動詞の二種となり、活用上より分類する時は、左の九種となる。

畧稱(四段活)

正格動詞

(五種)

- 四 段活用動詞 (上二段活)
- 上二段活用動詞 (下二段活)
- 上一段活用動詞 (上一段活)
- 下一段活用動詞 (下一段活)

變格動詞

(四種)

- 加行變格活用動詞 (加變活)
- 左行變格活用動詞 (左變活)
- 奈行變格活用動詞 (奈變活)
- 良行變格活用動詞 (良變活)

五十音圖の上に於ける正格動詞の語尾

● 四段
○ 上二
○ 下二
○ 上一
● 下一

わ行	ら行	や行	ま行	は行	な行	た行	さ行	か行	あ行	
	○		○	○		○	○	○		あ段
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	い段
	○	○	○	○		○	○	○	○	う段
	○		○	○		○	○	○	○	え段
							●	●	●	お段

注意、奈變、良變は四段に似、

加變は上二段に似、左變

は下二段に似て各少しづ

ゝ異なり。語尾變化表に

就いて知るべし。

動 詞 語 尾 變

四 段 活										上 二 段 活										下 二 段 活									
取	進	言	立	押	咲	有	死	起	落	用	恨	報	懲	來	得	受	瘦	立		加變活	來	得	受	瘦	立				
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
ら	ま	は	た	さ	か	な	に	く	ち	ひ	み	い	り	こ	え	け	せ	て	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
る	む	ふ	る	す	く	ぬ	る	く	つ	ふ	む	ゆ	る	く	う	く	す	つ	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
れ	め	へ	て	せ	け	れ	ぬ	れ	つ	ふ	む	ゆ	る	く	う	く	す	つ	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

○この語尾變化表は

國文法の説明上、

最必要なるものな

れば、よく諸記し

て、十分に口に慣

れしむるを要す。

○この表の最下段(命

令形)は之を省き

て別に記憶し、第一

段より第五段まで

を連續して諸誦す

べし。

○この表を誦するに

はかきくくけ

と語尾ばかり唱ふ

べからず。咲か

咲く 咲く 咲く

わ行	ら行	や行	ま行	は行
	○		○	○
○	○	○	○	○
	○	○	○	○
●	●	●	●	●
●	●	●	●	●
△	△	△	△	△

異なり。語尾變化表に就いて知るべし。

動 詞 語 尾 變 化 表

		活 段 二 下																	活 段 二 上																	奈變活		良變活		活 段 四								
下一段活		活 段 一 上							左變活											加變活																												
蹴		居	見	干	似	着	射	爲	植	垂	榮	進	教	兼	立	瘦	受	得	來	懲	報	恨	用	落	起	死	有	取	進	言	立	押	咲															
け	ゐ	み	ひ	に	き	い	せ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	こ	り	い	み	ひ	ち	き	な	ら	ら	ま	は	た	さ	か	第一段	未然形														
け	ゐ	み	ひ	に	き	い	し	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	き	り	い	み	ひ	ち	き	に	り	り	み	ひ	ち	し	き	第二段	連用形														
ける	ゐる	みる	ひる	にる	きる	いる	す	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	く	る	ゆ	む	ふ	つ	く	ぬ	り	る	む	ふ	つ	す	く	第三段	終止形														
ける	ゐる	みる	ひる	にる	きる	いる	する	うる	る	ゆる	むる	ふる	ぬる	つる	する	くる	うる	くる	る	ゆる	むる	ふる	つる	くる	ぬる	る	る	む	ふ	つ	す	く	第四段	連體形														
けれ	ゐれ	みれ	ひれ	にれ	きれ	いれ	すれ	うれ	るれ	ゆれ	むれ	ふれ	ぬれ	つれ	すれ	くれ	うれ	くれ	るれ	ゆれ	むれ	ふれ	つれ	くれ	ぬれ	れ	れ	め	へ	て	せ	け	第五段	已然形														
けよ	ゐよ	みよ	ひよ	によ	きよ	いよ	せよ	ゑよ	れよ	えよ	めよ	へよ	ねよ	てよ	せよ	けよ	えよ	こよ	りよ	いよ	みよ	ひよ	ちよ	きよ	ね	れ	れ	め	へ	て	せ	け	命令形															

○この語尾變化表は國文法の説明上、最必要なるものなれば、よく諳記して、十分に口に慣れしむるを要す。

○この表の最下段(命令形)は之を省きて別に記憶し、第一段より第五段までを連續して諳誦すべし。

○この表を誦するに
はかきくけ
と語尾ばかり唱ふべからず。咲か咲き咲く咲く咲けといふやうに唱ふべし。

上下一段活變格活語彙

上二段活	射る、鑄る、着る、煮る、似る、干る、簸る、見る、居る、率る、 (十語)
下一段活	蹴る、 (一語アルノミ)
加變活	來、 (一語アルノミ)
左變活	爲、御座す、 (二語アルノミ)
奈變活	往ぬ、死ぬ、 (二語アルノミ)
良變活	有り、居り、侍り、 (三語アルノミ) (今文ニテハ居リヲバ 四段活トシテ用フ)

注意 右の表に示せる所は動詞活用の識別について必要なるが
故に十分によく記憶すべし。

上一段活及左變活の合成語の例

上一段活		左行變格	
かへりみる、(顧) ゆめみる、(夢) かんがみる、(鑑) おもんみる、(惟) ついゐる、(突居) ひきゐる、(引率) (此ノ類ノ語十數個アレドモ、中ニハ上一段活トナレル者アリ。)		甘んず、輕んず、重んず、辱うす、 心す、罪す、與す、欲す、 歎ず、論ず、征す、説明す、命令す、 明かにす、詳かにす、一にす、徳とす、 (コノ類ノ漢語ヨリ來レルモノ最多シ)	

注意

外國語を國語の動詞に轉用する時は常に「爲」を添へて語尾とし、
左行變格の活用をなさしむるなり。

四段活及上下二段活語例 附活用識別法

自動詞				他動詞			
飽く	()	瘦す	()	行く	()	刈る	()
老ゆ	()	戯る	()	近ゆ	()	乞ふ	()
吹く	()	笑ふ	()	連る	()	吹く	()
開く	()	閉づ	()			開く	()
浮く	()	立つ	()	添ふ	()	浮く	()
退く	()	入る	()	進む	()	退く	()
浮ぶ	()	沈む	()	育つ	()	浮ぶ	()
溶く	()	剥ぐ	()	知る	()	溶く	()
焼く	()	脱ぐ	()	折る	()	焼く	()

割る()	破る()	割る()	破る()
盡く()	浮く()	盡す()	浮す()
活く()	轉る()	活す()	轉す()
乗る()	省る()	乗す()	省く()
逃ぐ()	暮る()	逃す()	暮す()
落つ()	亡ぶ()	落す()	亡す()
通る()	移る()	通す()	移す()
成る()	餘る()	成す()	餘す()
隠る()	倒る()	隠す()	倒す()
寄る()	登る()	寄す()	登す()
刺さる()	疊まる()	刺す()	疊む()
結ぼる()	籠る()	結ぶ()	籠む()
添はる()	連なる()	添ふ()	連ぬ()
	燻ぼる()		燻ぶ()

注意一、

國語の動詞は(漢語より轉來せる左變活を除けば)四段活のもの最多く、下二段活之に次ぎ、上二段活又之に次ぐ。右の表は其の一斑を掲げたるものと知るべし

注意二、

右の表に掲げられたる各語に就き、其の活用を區別して、括弧内に記入せよ。

其識別法は左の如し。

打消す時「泣かず」笑はず」の如く「アズ」となるものは 四段活なり。

打消す時「起きず」亡びず」の如く「イズ」となるものは 上二段活なり。

打消す時「受けず」堪へず」の如く「エズ」となるものは 下二段活なり。

注意三、

既に上下一段活及變格活の動詞を記憶し、又上下二段活、四段活の識別法を學びたれば、如何なる動詞の語尾活用も識別し得べし。

形容詞語尾變化表

志久活	久活		
		未然形	第一段
正 ^{ただ}	善 ^よ	一く	第二段
一しく	一く	連用形	第三段
一し	一し	終止形	第四段
一しき	一き	連體形	第五段
一しけれ	一けれ	已然形	

注意、右の語尾變化表も、よく諸記して、十分に口に慣れしむべし。

口語用言尾

活 段 一 上														活 段 四						口語		
(段 一 上)							(段 二 上)							(奈變)	(良變)	(活 段 四)				(文語)		
受	得	居	見	干	似	着	射	懲	報	恨	用	落	起	死	有	取	進	言	立	押	咲	第一段 第二段 第三段 第四段 第五段
一ケ	エ	キ	ミ	ヒ	ニ	キ	イ	リ	イ	ミ	ヒ	チ	キ	ナ	ラ	マ	ハ	タ	サ	カ		
一ケ	エ	キ	ミ	ヒ	ニ	キ	イ	リ	イ	ミ	ヒ	チ	キ	ニ	リ	ミ	ヒ	ナ	シ	キ		
一ケル	エル	キル	ミル	ヒル	ニル	キル	イル	リル	イル	ミル	ヒル	チル	キル	ヌ	ル	ム	フ	ツ	ス	ク		
一ケル	エル	キル	ミル	ヒル	ニル	キル	イル	リル	イル	ミル	ヒル	チル	キル	ヌ	ル	ム	フ	ツ	ス	ク		
一ケレ	エレ	キレ	ミレ	ヒレ	ニレ	キレ	イレ	リレ	イレ	ミレ	ヒレ	チレ	キレ	ナ	レ	メ	ヘ	テ	セ	ケ		

○文語の奈變は口語にて四段となるが普通なれど、奈變のまゝにいふ地方もあり。

○文語の下一段は良行四段にいふ人も少からず。

○文語の上下二段は上下一段にいふが普通なれど、上下二段のまゝに用ふる地方もあり。

○恨むといふ語は四段にいふこと多し。

志久活 正 一しく 一しく 一し 一しき 一しけれ

注意、 右の語尾變化表も、よく諸記して、十分に口に慣れしむべし。

口 語 用 言 語 尾 變 化 表

口語	四 段 活										上 一 段 活										下 一 段 活										加變 (加變)	左變 (左變)	久活 (久活)	志久活 (志久活)				
	(活 段 四)										(段 二 上)					(段 一 上)					(段 二 下)																	
(文語)	(奈變)	(良變)									起	落	用	恨	報	懲	射	着	似	干	見	居	得	受	瘦	立	兼	教	進	榮	垂	植	(下一段)	來	爲	善	正	
第一	ナ	ラ	マ	ハ	タ	サ	カ	キ	チ	ヒ	ミ	イ	キ	ニ	ヒ	ミ	ヰ	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	レ	エ	ケ	蹴	コ	セ	ク	シク	シク	シク	シク	シク	
第二	ニ	リ	リ	ミ	ヒ	ナ	シ	キ	チ	ヒ	ミ	イ	キ	ニ	ヒ	ミ	ヰ	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	レ	エ	ケ	蹴	キ	シ	ウ	シ	ウ	シ	ウ	シ	
第三	ヌ	ル	ル	ム	フ	ツ	ス	ク	ナル	ヒル	ミル	イル	キル	ニル	ヒル	ミル	ヰル	エル	ケル	セル	テル	ネル	ヘル	メル	エル	レル	エル	ケル	ケル	クル	スル	イ	シイ	シイ	シイ	シイ	シイ	
第四	ヌ	ル	ル	ム	フ	ツ	ス	ク	ナル	ヒル	ミル	イル	キル	ニル	ヒル	ミル	ヰル	エル	ケル	セル	テル	ネル	ヘル	メル	エル	レル	エル	ケル	ケル	クル	スル	イ	シイ	シイ	シイ	シイ	シイ	
第五	チ	レ	レ	メ	ヘ	テ	セ	ケ	チレ	ヒレ	ミレ	イレ	キレ	ニレ	ヒレ	ミレ	ヰレ	エレ	ケレ	セレ	テレ	子レ	ヘレ	メレ	エレ	レレ	エレ	ケレ	ケレ	クレ	スレ	ケレ	ケレ	ケレ	ケレ	ケレ	ケレ	ケレ

○文語の奈變は口語にて四段となるが

普通なれど、奈變のまゝにいふ地方もあり。

○文語の下一段は良行四段にいふ人も少からず。

○文語の上下二段は上下一段にいふが普通なれど、上下二段のまゝに用ふる地方もあり。

○恨むといふ語は四段にいふこと多し。

○要するに口語用言の語尾變化は其の地方によりて差異多く、未だ一定の規則あらず。

形容動詞

○有りといふ動詞の語尾を取りて、良行變格に活用する一種の形容詞あり。

この種の形容詞は、事物の状態をあらはすことは、普通の形容詞と同じく、命令形を具へ、助動詞を附屬せしめ得る等のことは動詞に異らず。よりて之を形容動詞と名づけ、性質上より見る時は、形容詞の中に入れ、形式上より見る時は動詞の中に入る。

注意、右は誤解を生じ、混雜を來す恐あることなれば、よく會得し置くべし

助動詞表第

活用	下二段活用						奈變活	良變活						本形	意義					
	ル	ラル	ス	サス	シム	ツ		タリ	リ	ケリ	ナリ	ザリ	ベカリ			第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
打消						完了	完了	完了	完了	過去、詠歎、	指定	(ズに同じ)	(ベシに同じ)			未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
ず	れ	られ	せ	させ	しめ	て	な	たり	り	けり	なら	ざら	べから							
ず	れ	られ	せ	させ	しめ	て	に	たり		けり	なり	ざり	べかり							
ず	る	らる	す	さす	しむ	つ	ぬ	たり	り	けり	なり	(ざり)	(べかり)							
ぬ	る	らる	する	さする	しむる	つる	ぬる	たる	る	ける	なる	ざる	(べかる)							
ね	る	らる	すれ	さすれ	しむれ	つれ	ぬれ	たれ	れ	けれ	なれ	ざれ	(べかれ)							
	れよ	られよ	せよ	させよ	しめよ	てよ	ね				なれ	ざれ								

形容動詞

(良行變格活)

堂々	儼然	活潑	美	熾	明か	正し	善			
一たら	一たら	一なら	一なら	一なら	一なら	一から	一から	未然形	連用形	終止形
一たり	一たり	一なり	一なり	一なり	一なり	一かり	一かり	連體形	已然形	命令形
一たれ	一たれ	一なれ	一なれ	一なれ	一なれ	一かれ	一かれ			
一たれ	一たれ	一なれ	一なれ	一なれ	一なれ	一かれ	一かれ			

形容動詞語尾變化表

○「善からむ」無からむ
 ○「善けむ」「無けむ」
 などいふことあり。

助 動 詞 表 第 一

詞動名					
(活格變行)					
堂 ドウ 々 ドウ	儼然 ゲンゼン	活潑 カツパツ	美 ビ	熾 サカモ	明 アカ
―たら	―たら	―なら	―なら	―なり	―なり
―たり	―たり	―にして	―にして	―にして	―にして
―たれ	―たれ	―なれ	―なれ	―なれ	―なれ
―たれ	―たれ	―なれ	―なれ	―なれ	―なれ

助動詞表第二 (屬所)

所屬動詞の活段		第 一 段										第 二 段					第 三 段					第 四 段		(注意二)		
特 例	四段、奈變、良變、ノミ ニツク	右ノ外ノ動 詞ニツク								(注意一)					良變ノ動詞 ニ對シテハ 其ノ第四段 ニツク											
(本形)	ル	ス	ラル	サス	シム	ズ	ザリ	ジ	ム	マホシ	ツ	ヌ	タリ	ケリ	キ	ケム	タシ	ラム	ラシ	ベシ	ベカリ	マジ	ナリ	如シ	リ	
第一段 未然形	れ	せ	られ	させ	しめ	ず	ざら	○	○	まほしく	て	な	たら	けら	○	○	たく	○	○	○	べく	べから	まじく	なら	如く	ら
第二段 連用形	れ	せ	られ	させ	しめ	ず	ざり	○	○	まほしく	て	に	たり	けり	○	○	たく	○	○	○	べかり	まじく	なり	如く	り	
第三段 終止形	る	す	らる	さす	しむ	ず	ざり	じ	む	まほし	つ	ぬ	たり	けり	き	けむ	たし	らむ	らし	べし	べかり	まじ	なり	如し	り	
第四段 連體形	るる	する	らるる	さする	しむる	ぬ	ざる	じ	む	まほしき	つる	ぬる	たる	ける	し	けむ	たき	らむ	らし	べき	べかる	まじき	なる	如き	る	
第五段 已然形	るれ	すれ	らるれ	さすれ	しむれ	ね	ざれ	じ	め	まほしけれ	つれ	ぬれ	たれ	けれ	しか	けめ	たけれ	らめ	らし	べけれ	べかれ	まじけれ	なれ	如けれ	れ	

注意一、きハ加變及
左變ノ動詞ニ對シテ
ハ左ノ如ク附屬ス。

來(し)か 來(き)し
(來き、來き、ト)

爲(し)か 爲(き)し
(爲し、爲し、ト)

注意二、りハ四段活
ノ第五段ト左變ノ第
一段トニ附屬シ他ノ
動詞ニ附屬セズ。

◎左記ノ動詞ニ各助動
詞ヲ連ネテ其ノ語尾
活用ヲ(取られ、取
らる、取らるゝ、取
らるれ、等ノ如ク)
唱ヘ試ミヨ。

取る、問ふ、押す、
起く、報ゆ、恨む、
寝ぬ、捨つ、攻む、
見る、着る、蹴る、
來、往ぬ、死ぬ、
爲論ず、信用す、
進む、自進む、他
立つ、自立つ、他
焼く、自焼く、他
有り、異なり、

時の助動詞組合せの表

○過去、現在、未來に各完了を組合する時は時の表。し。方に六種あり。即過去、過去完了、現在、完了、未來、未來完了、是なり。

完了					現在	未來	過去	(過去推量)
咲きぬ	咲きたり	咲けり	咲きつ	咲く				
咲きなむ	咲きたらむ	(咲けらむ)	咲きてむ	咲かむ	過去	(過去推量)	咲きてき	咲きけり
咲きにき	咲きたりき	(咲けりき)	咲きてき	咲きき			咲きてけり	咲きけむ
咲きにけり	咲きたりけり	(咲けりけり)	咲きてけり	咲きけり			咲きてけむ	咲きにけむ
咲きにけむ	咲きたりけむ	(咲けりけむ)	咲きてけむ	咲きけむ			咲きてけむ	咲きにけむ

逃す	進む	起す	他動詞	逃ぐ	進む	起く	自動詞
逃 にが さる	進 すす める	起 た さる	他動 受身	逃 に げらる	進 すす まる	起 た きらる	(自動 受身)
逃さ	進め	起さ	他動 使役	逃げ	進ま	起き	自動 使役
し す し む	し さ す す し む	し す し む		し む す す し む	し む す す し む	し む す す し む	
逃さ	進め	起さ	他動 使役 受身	逃げ	進ま	起き	自動 使役 受身
し め せ らる	し め せ らる	し め せ らる		し め せ らる	し め せ らる	し め せ らる	

○受身 使役の助動詞を尊敬の意義に用ふるときは、左の如く組合せて用ふ。
但し、括弧内に入れたる分は、今の文に敬語として用ふること稀なり

進進起起 めまささ (しむ)	逃逃進進 ななま (す)	進進起起 めげさ (さす)	逃逃進進逃逃 すすむむぐく (自他)
進進起起 めまささ (しめらる)	逃逃進進 ななま (せらる)	進進逃逃 めげさ (させらる)	逃逃進進逃逃 ささまめげさ (るらる)
進進起起 めまささ (しめ給ふ)	逃逃進進 ななま (せ給ふ)	進進逃逃 めげさ (させ給ふ)	逃逃進進逃逃 ししみめげさ (給ふ)

(表ニ載セタル各語ヲ用ヒテ文ヲ作り試ミヨ)

助動詞として用ひらるゝことある動詞の例

給ふ	奉る	候ふ	侍り	得	能ふ
尊				敬	可
意義					
用					
例					
一首の歌をよみ給ふ。	○八歳にならせ給ふ。	君に仕へ奉る。	○御起居を伺ひ奉る。	差送り候ふ。	○雨降り候ふ。
恨めしく思ひ侍り。	○久しく待ち侍りぬ。	答へ得。	○説明し得ず。	維持し能はず。	

注意一、これ等の動詞は他の動詞助動詞の第二段に連る。
注意二、能ふは打消の場合の外用ふること稀なり。

動詞が助詞と約合して一語の如く取扱はるゝ例

	成 立	用 例
なり	關係助詞にト動詞あり ト約リテ成レルモノ	忠臣なり。 ○悪人ならず。
たり	關係助詞とト動詞あり ト約リテ成レルモノ	干城たり。 ○人たる者は……………
てふ	關係助詞とト動詞いふ ト約リテ成レルモノ	仁てふものは……………

注意一、このなりは、動詞の下に附屬する時は助動詞として説明すれども、他の助動詞とは其の性質を異にすることを記憶すべし。

注意二、このたりは、動詞の下には附屬せず。之を助動詞のたりと混同すること勿れ。

助動詞相互の連續

○助動詞は、相互に連續するものと、せぬものとあり。連續する場合には動詞に於けると同じ活段に連るものなり。左に數例を示さむ。餘は讀書の際注意して會得すべし。

歸る、ぬ、らむ
往く、り、なり、べし
讀む、しむ、らる、つ、けり
書く、ざり、べかり、ず
憤る、す、給ふ、ぬ、けむ
打つ、る、たり、き、なり、む
讀む、す、らる、ざり、き、なり、べし

歸りぬらむ。
往けるなるべし。
讀ましめられてけり。
書かざるべからず
憤らせ給ひにけむ。
打たれたりしならむ。
讀ませられざりしなるべし。

助動詞についての注意事項

一、助動詞は、動詞又は他の助動詞の下に属すべきものなれば、其の他の品詞に属したる同形の語を見るも、それは助動詞とは異なりと知るべし。

二、今の普通文には「攻撃せ」らる、説明せ「さす」等の場合に「せ」を約めて「さ」とし「攻撃さる」「説明さす」等となすことあり。

三、助動詞の「ざり」べかりは「ず」べし」が動詞の「あり」と約り合したるを一助動詞として取扱ふものなり。されば「たし」まじ」如し」等の「あり」と約り合したる「たかり」まじかり」如かり」等を一助動詞として扱取ふも妨なし。（「たり」といふ助動詞も亦「つ」と「あり」との約合なり。）

や行わ行だ行活用動詞語彙

や行上二	老 ゆい 、悔 ゆい 、報 ゆい
や行下二	甘 ゆえ 、愈 ゆえ 、覺 ゆえ 、おび ゆえ 、思 ゆえ 、消 ゆえ 、聞 ゆえ 、崩 ゆえ 、越 ゆえ 、肥 ゆえ 凍 ゆえ 、泣 ゆえ 、榮 ゆえ 、聳 ゆえ 、絶 ゆえ 、費 ゆえ 、潰 ゆえ 、萎 ゆえ 、煮 ゆえ 、生 ゆえ 映 ゆえ 、冷 ゆえ 、殖 ゆえ 、吼 ゆえ 、見 ゆえ 、まみ ゆえ 、燃 ゆえ 、萌 ゆえ
わ行上二	ゐる（居） ぬる（率） ひきぬる（率）
わ行下二	餓 うゑ 、植 うゑ 、据 す
だ行上二	怖 お 、諂 し 、閉 づ 、綴 さ 、捻 ね 、耻 ぢ 、潰 ひ 、もみ ぢ 、攀 づ
だ行下二	出 で 、奏 ひな 、序 づ 、撫 で 、抽 ひ 、秀 づ 、詣 まう 、愛 め 、漬 ひ

○右の諸動詞は能く注意して假名遣を誤るべからず。

用言の語尾に於ける音便

き、ぎ、し、ないニ轉 ズル例	聞きて、聞いて、仰ぎて、仰いて、刺して、刺いて
ひ、ち、うニ轉ズル例	高き山、高い山、山は高し、山は高い
ひ、ち、うニ轉ズル例	問ひて、問うて、言ひて、言うて
に、み、び、んニ轉 ズル例	死にて、死んで、進みて、進んで、飛びて、飛んで
ひ、ち、り、つニ轉 ズル例	買ひて、買つて、持ちて、持つて、依りて、依つて
く、ち、うニ轉ズル例	赤く塗る、赤う塗る、美しく咲く、美しう咲く
死ぬべく、覺ゆ	死ぬべく、覺ゆ
む、ち、うニ轉ズル例	行かむ、行かう、罪せむ、罪せう

〔問は「問ひ問ふ」問へ「問わ問い問う問え」下發音スル類モ右ニ記スル音便ニ異ルナシ。サレド文ニ書クトキハ猶「は」「ひ」「ふ」「へ」下書ク習慣ナリ。〕

用言を體言として取扱ふ例

○用言を、其の用言たる性質を失はせずして、體言と同様に取扱ふには、其の第四段（連體形）の語尾による。

有、り、無、し、	有る、と無き、とに拘らず。
明、く、暮、る、	明くるより暮るゝまではたらく。
落、ち、た、り、	落ちたるを拾ふ。
言、は、ず、言、ふ、	言はぬが言ふにまさることあり。

注意一、 右の如き場合には、用言も體言と同じく、が、の、に、を、と、へ、より、まで等の關係助詞を附くるを得。

注意二、 こほり、かすみ、よろこび、うちじに、花々、田うゑ、等の語は、動詞の第二段より轉じて、全く體言に變化したるものなれば、混同すべからず。

用言句を體言句として取扱ふ例

書を讀む、

書を讀むを好む。

他人を依頼す、

他人を依頼するに及ばず。

人に侮らる、

人に侮らるゝが口をし。

文を體言句として取扱ふ例

花、美し、

花の美しきに似たり。

余、家に歸る、

余が家に歸るを待つべし。

花、美しく咲きたり、

花の美しく咲きたるを観る。

注意、文を體言句として取扱ふ時は、主部の下にの、又は
がの助詞を附くるを常とす。

用言と體言との連結

(連體法)

○用言は其の第四段の語尾を以て體言に連結して體言句を作る。

○用言の體言に連る法を連體法といふ。

○用言句(又は文は最後の用言が連體法をなして體言(又は體言句)に連結して體言句を作る。(次ノ頁ノ例ヲ見ヨ)

○待つ人

○説明する事項

○讀まする本

○死にし人

○有る金

○見る物

○教へらるゝ人

○來む年

○死ぬる人

○蹴る鞠

○散りぬる花

○住みけむ人

○起くる時

○善き事

○持ちたる田地

○すべき事

○來る人

○惡しき行

○持てる田地

○すまじき行

○榮ゆるみ代

○明かなる理由

○行かぬ人

○亡されたる國

○爲る事

○堂々たる威風

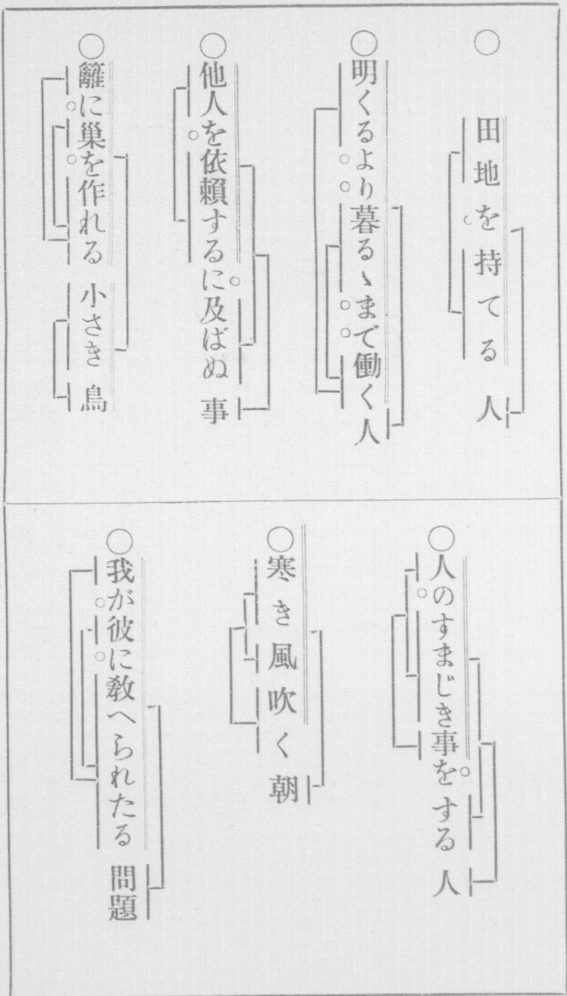
○行かざる人

○讀ませらるゝ本

注意、待ち人有り金見物落ち葉枯れ草等の語は、動詞の第二段の語尾が體言と
合して熟語の體言となりたるものなれば、混同すべからず。

語脈解剖の例

二、



連用法による用言の連結

- 用言を、直接に他の用言に連ぬるには、其の第二段(連用形)の語尾を用ふ。其の法を連用法といふ
- 用言を、連用法によりて他の用言に連ぬるに、「賣り出す」有り餘る」見にくし」教へ難し」讀ませ置く」取られ易し」等の如く、其の語意殆ど相熟合することあり。斯る場合には、之を用言句とせずして一語と見るも可なり。
- 又「楽しく思ふ」苦しく感ず」憚らず言ふ」行ふべく決心す」等の如く、上なる用言が副詞の如くなることあり。斯る場合には、之を用言句として取扱ふべし。

接續助詞による用言の連結

用言(又は用言にて終る文句)はて、で、つ、い、ながら、ば、ど、ども、とも、に、を、が、も、等の接續助詞によりて、他の用言(又は用言にて終る文句)に連結す

○読みて聞かす
○言はで思ふ
○歩みつゝ語る
○咲けば散る
○苦しけれども堪へたり
○物を言はで思に沈む

○雨降らば行くことをやめむ
○雨降れば我行かず
○罪ありとも許されなむ
○寒くとも我は堪へむ
○敵艦を追撃せしが遂に及ばざりき
○日暮れむとするに宿るべき家なし

○接續助詞が用言の語尾の下につくには、それぐ定めあり。
左表の如し。

	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
久活、志久活の用言	ば、ども	て		に、を、が、も	ば、ど、ども
右の外の用言	ば、で	て、つゝ、ながら	とも	に、を、が、も	ば、ど、ども

中止法による用言の連結

二個以上の用言(又は用言にて終る文句)を其の意義に於ては並列せしめ、其形式に於てのみ連結せしむるには、其の最後に置かるゝ用言の外は第二段の語尾を用ふ。其の法を中止法といふ

○喜び怒り哀み樂む

○厚く廣く長し

○打たれ蹴られ嘲られ笑はる

○克く忠にして克く孝なり

○眉濃く目大にして鼻高し

○東へ行くもあり西へ去るもあり

○兄は歩ましめられ弟は負はれたり

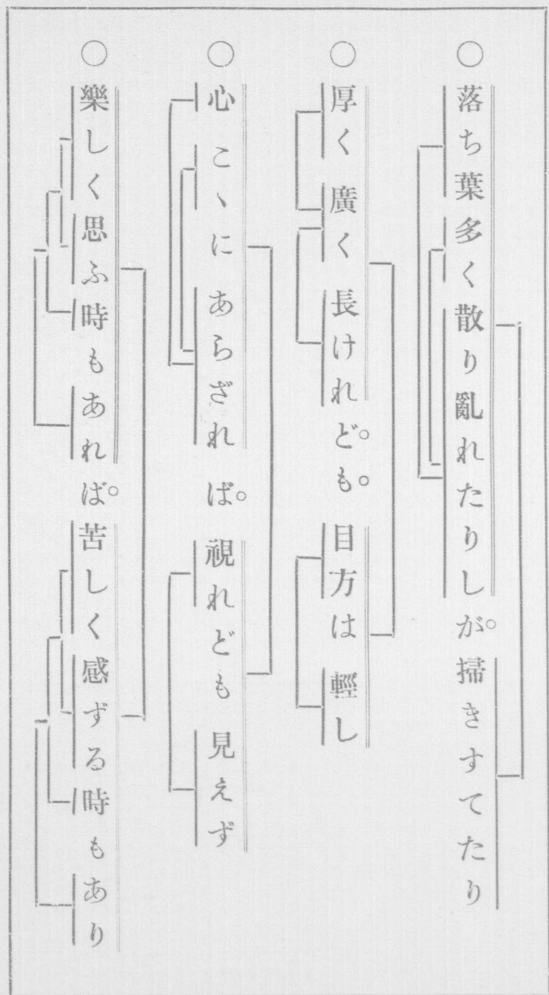
○善き者は賞せられ惡しき者は罰せられむ

注意一、用言を中止法にて連結するとき、時の助動詞は最後の用言にのみ附屬せしむ。

注意二、近時の文にては、接續助詞のてにて連結すべき場合に中止法を用ひ、中止法を用ふべき場合にてを用ひて連結すること少からず。

語脈解剖の例

三、



副詞と副詞との連結
副詞と用言との連結

○程度を示す副詞は、其のまゝ、他の副詞に連結して副詞句を作ることもあり。

○稍 巧に

○いと 能く

○殆ど 全く

○甚 盛に

○すべての副詞は、其のまゝ、用言(又は用言にて終る文句)に連結す

○さつと 吹く

○最 美し

○未 來らず

○一層 進歩す

○再三 辭職を願ふ

○泣くく 家に歸る

○副詞は其の性質種々雑多にして特異なる使用法を有するもの少からず。故に副詞の加はりたる用言句の中には、其の語形固定して普通の用言句と同様に取扱ふ能はざるものあり。

○豈 慎まざるべけむや

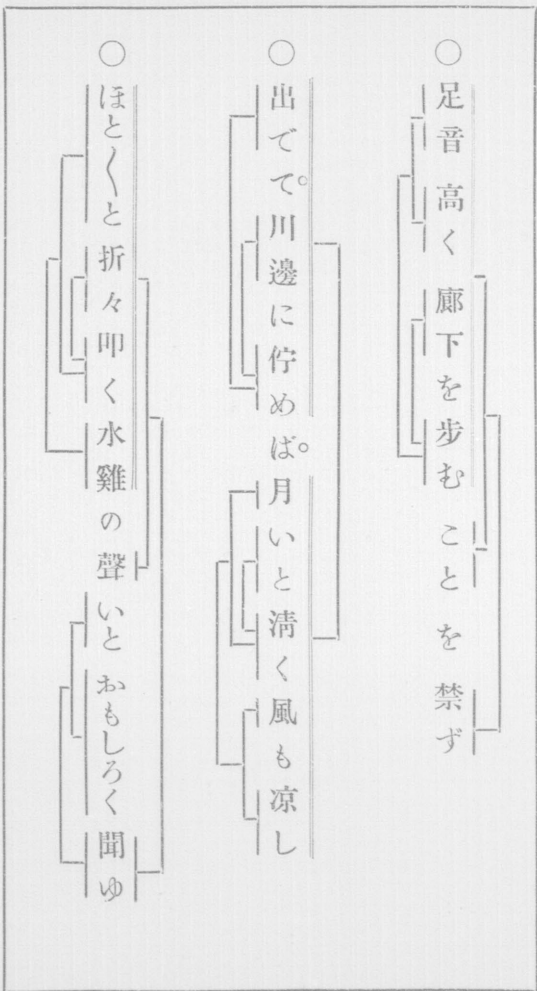
○たとひ 行く(とも……)

○よも 逃さじ。

注意、「殆ど中央」稍南の方「唯半日」などは體言句を作る特異の例なり。

語脈解剖の例

四、



接續詞を用ひたる體言句、用言句、及文

筆、墨及紙
代數並に幾何
牛或は馬
雨若しくは風
支那即清國
山又山
兵士就中歩兵
歩兵砲兵さでは工兵

晴れ又曇る。
高く又低し。
善人あり又悪人あり。
月清く且明なり。
或は花をめで、或は月を賞す。
都合あしき爲、謝絶したり。
病にかゝりし故、入院せり。
病氣に候ふ間、缺席致し候ふ。

助詞分類表

關係助詞	が、の、と……と	體言と體言とをつなぐ。
接續助詞	が、の、に、を、と、へ、より、まで、	體言と用言とをつなぐ。
	ば、ど、ども、とも、て、で、つゝ、 ながら、に、を、が、も、	用言と用言とを續く。
添意助詞	は、も、ぞ、なむ、し、こそ、さへ、だに、 すら、のみ、ばかり、や、か、な、…そ、	諸品詞と用言との間に置かる。
感歎助詞	や、か、ぞ、な、 (前のと同一の助詞なり)	用言につきて文を結ぶ。
	や、よ、な、かな、かも、かし、ばや、	文の中間、又は文の末に置かる。

注意、同形異類の助詞は助詞一覽表に就いて其の區別を知るべし。

助詞相互の連續

○助詞相互の連續は、極めて繁雜なれば、一々之を示すこと能はざれど、應用の廣き連續法を、表に作りて左に掲ぐ。

餘は、讀書の際、注意して會得すべし。

詞	助	係	關
まで	から	より	へ と に を

添	意	助	詞
は	も	ぞ	なむ
か	やし	こそ	さへ
		だに	すら
		のみ	ばかり
		な…そ	

例　をば　ぞ　を　を　を　を　に　は　も　に　だ　に　の　み　に　な　…　そ

接	續	助	詞
ば	て	で	つゝ ながら

添	意	助	詞
は	も	ぞ	なむ
や	し	か	こそ
		さへ	だに
		すら	のみ
		ばかり	な…そ

意注 つばばててててて例

「ば、は」「ば、も」
ば、すら」などは
相連續せず。斯る
例外は他にも少
からず。

助詞使用上の注意事項

◎ 所屬と意義とについては、助詞一覽表に就いて詳細を知るべし。

一、「と…と」と「と」
〔體言ト體言トヲツナグ〕と…とト體言ト用言トヲツナグ〕とトガ用言〔體言トシテ取扱ハル、時〕ノ下ニ置カル、時ハト…ト〕ハ第四段〔連體形〕ニ屬シ、〔ト〕ハ言ヒ切ラレタル形〔多クハ第三段〕ニ屬ス。

二、未定の「ば」と既定の「ば」
〔接續助詞ノばヲ未定ノ事項ニ用フル時ハ用言ノ第一段〔未然形〕ニ屬シ、既定ノ事項ニ用フル時ハ第五段〔已然形〕ニ屬ス。〕

三、未定の「とも」と既定の「ども」
〔接續助詞ノともハ久活志久活用言ノ第一段〔未然形〕ニ屬シ、他ノ用言ノ第三段〔終止形〕ニ屬ス。〕
第五段〔已然形〕ニ屬ス。

四、添意助詞「ぞ」「や」「か」「な」を
〔添意助詞ヲ文句ノ末ニ用フル場合ニハ〕ぞハ用言ノ第四段〔連體形〕ニ屬シ、やハ第三段〔終止形〕ニ屬ス、かハ第四段〔連體形〕ニ屬シ、なハ第三段〔終止形〕ニ屬ス。〕

五、添意助詞「ぞ」「なむ」「や」「こそ」の
〔ぞ〕なむ〕や〕か〕ノ下ニ置カレテ文ヲ結ブ用言ハ、第四段〔連體形〕ニテ結び、こそノ下ナル用言ハ、第五段〔已然形〕ニテ結び。

六、添意助詞「な…こそ」
〔な…こそハ動詞ノ第二段〔連用形〕ヲ挟ミテ文ヲ結ブ。但加變、左變ノ動詞ノミハ其ノ第一段〔未然形〕ヲ換ム。〕

注意 (生徒は各自に工夫して練習用の表を製し、右の事項を熟習すべし。)

ば、ば、とも、ども所屬辨別練習表

(屢誦みて口に慣れしめよ)

	未定のば(第一段)	既定のば(第五段)	未定のとも(第三段)	既定のども(第五段)
四段	咲かば 散らば	咲けば 散れば	咲くとも 散るとも	咲けども 散れども
良變	有らば	有れば	有りと	有れども
同	明ならば	明なれば	明なりとも	明なれども
同	行きたらば	行きたれば	行きたりとも	行きたれども
奈變	死なば	死ぬれば	死ぬとも	死ぬれども
同	行きなば	行きぬれば	行きぬとも	行きぬれども
上二段	起きば 用ひば	起くれば 用ふれば	起くとも 用ふとも	起くれども 用ふれども

上二段	下二段	同	同	下二段	加 變	左 變
射ば 見ば	得 ^え ば 教へば	得しめば 讀ませば	攻められば 打たれば	蹴 ^こ ば 來 ^こ ば	爲 ^ゐ ば 欲せば	
射れば 見れば	得 ^え れば 教ふれば	得しむれば 讀ますれば	攻めらるれば 打たるれば	蹴 ^こ れば 來 ^こ れば	爲 ^ゐ れば 欲すれば	
射るとも 見るとも	得 ^え とも 教ふとも	得しむとも 讀ますとも	攻めらるとも 打たるとも	蹴 ^こ るとも 來 ^こ とも	爲 ^ゐ とも 欲すとも	
射れども 見れども	得 ^え れども 教ふれども	得しむれども 讀ますれども	攻めらるれども 打たるれども	蹴 ^こ れども 來 ^こ れども	爲 ^ゐ れども 欲すれども	

雜 活	良 變	雜 活	同	同
行かざば	行かざらば	有りせば		
行かねば	行かざれば	有りしかば		
行かずとも			有りけむとも	有らむとも
行かねども	行かざれども	有りしかども	有りけめども	有らめども

久 活	同	志久活	同
無くば	得べくば	正しくば	有るまじくば
無ければ	得べければ	正しければ	有るまじければ
無くとも	得べくとも	正しくとも	有るまじくとも
無けれども	得べけれども	正しけれども	有るまじけれども

熟語及疊語の例

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

品詞轉成の例

體言		言		用		言		副		詞		接續詞		感動詞			
名詞		代名詞		動詞		助動詞		形容詞		副		詞		接續詞		感動詞	
君、僕		君、僕		給ふ、候ふ、		給ふ、候ふ、		よし、疾し、 長し、安し、		よく、疾く、疾くく、 長々、安々、安々と、 こゝに、何ぞ、 いづくんぞ、				こゝに、			
教、耻、光、霞、赤、 白、すし、からし、				教ふ、耻づ、光る、霞む、				赤し、白し、 すし、からし、		いかに、						いかに、	
今、昔、時、日、 誠、常、		及ぶ、並ぶ、 就く、 然り、						今、昔、時々、日々、 誠に、常に、		及、並に、 然れば、因りて、 就いては、							
間、處、爲、故、		あまる、つまる、決す、 極む、しきる、思ふ、恐る、 願ふ、返す、行く、						あまり、つまり、 頻りに、極めて、 恐らくは、願はくは、 返すく、行くく、		間、處、 爲、故、							
あはれ								さ、斯く、さて、また、 斯くて、また、 さてく、								あはれ、 さてく、	

○副詞及用言の連體形を假に體言として取扱ふことあり。
例、皆に與ふ。すべてを知る。落つるを拾ふ。善きを選ふ。
○一の單語に兩種の品詞を兼ねしめたる如き用ひ方あり。
例、花を見に行く。本を取りにかへる。

接頭語及接尾語の例

○接頭語及接尾語は、獨立して單語の資格を有つこと能はず、他の語句に附着して或は其の聲調を整へ、或は意義を加へ、或は品詞を轉ぜしむる等の用をなすものなり。接尾語の中には稍、助詞に似たるものあれども、上なる語句に密着して分離し難き點は、助詞に異なり。

接頭語		接尾語	
さ夜、 た比ぶ、 取り亂す、 相増す、	さ迷ふ、 た易し、 取り逃す、 相願ふ、	これ等、 歌など、 武士ども、 公たち、 殿ばら、 友どち、 手つき、 厚み、 厚さ、 嬉しげ、 かしこげ、	我等、 梅、櫻など、 子ども、 友だち、 法師ばら、 女どち、 口つき、 深み、 深さ、 心有りげ、 心地よげ、
初陣、 小松、 御代、 眞心、 生糸、 素顔、 幾日、	はつ春、 を川、 御名、 眞黒、 生漆、 素手、 幾人、	春めく、 今めかす、 哀がる、 鄙ぶ、 才子ぶ、 頭だつ、 黄ばむ、 隔がまし、 男らし、	時めく、 時めかす、 苦しがる、 大人ぶ、 高ぶる、 重だつ、 けしきばむ、 人がまし、 女らし、
		雨降る毎に、 路すから、 友がり、 三人つゝ、 身づから、 不肖ながら、 入れ物ながら、 行くまに、 花見がてら、	花を見る毎に、 夜すから、 或人のがり、 五圓づゝ、 口づから、 憚ながら、 枝ながら、 水のまに、 遊びがてら、

文の成分

主部		叙述部	
主語に係る語句	主語	叙述語に係る語句	叙述語
主語の修飾語(句)	主語	叙述語の修飾語(句) 客語(句) 補足語(句)	叙述語

○補足語を補語、叙述語を述語と略稱す。

○述語の修飾語は客語の上若くは下に在るを常とすれども、時としては主部の上に位することあり。何れも形に於ては述語に係るものなれど、意味に於ては其の下に位する語句のすべてに通じて係るものなり。

○文は、少くとも主語と述語とを具へざるべからず。而して述語の性質によりては、客語補語を要す。(此の四成分は文の要素ともいふべし)客語は主語たる事物に對して働掛受身の關係を有する事物を示す語句にして、補語は述語の意味が不明瞭なる時之を補足する爲に用ふる語句なり。

○主語は一個若くは並列したる數個の体言より成る○主語の修飾語は体言、体言句(が、の、を伴ふ)又は用言、用言句(連体法)より成り、主語と連結して体言句を成す○述語は用言より成る(用言句より成ること無し)○述語の修飾語は体言、体言句(に、と、へ、より、まで等を伴ふ)又は用言、用言句(連用法となり、又は接續助詞を伴ふ)副詞、副詞句(そのまゝ)より成る。

○客語は体言、体言句(を、を、して、に等を伴ふ)より成る○補語は体言、体言句(に、と等を伴ふ)用言、用言句(連用法)より成る。

◎ 文の種類

○文は其の性質上より區別して、平叙文 疑問文 命令文 感歎文 等となし、組織上より區別して 單文 複文 重文 の三種となす。

○文には、他の文を句として包含するものあり。之を複文と名づく。之に對して、文中に他の文を包含せざるものを單文と名づく。(複文に包含せらるゝ文を節と名づることあり)

○文中の語句は、悉く最後の用言に係り、形式上、思想上共に之に歸着するを常とす。されど文中の語句が其の思想に於ては二個以上の用言に分屬して相對立し、形式に於てのみ最後の用言に歸着終結するものあり。斯る文を重文と名づく。

○複文と重文とは、相互に包含せらるゝことあり。

◎ 文の成分の顛倒及省畧

○文は其の成分の位置を顛倒し、又は其の成分の一個若くは數個を省畧すること少からず。文の成分を省畧するには、或は用言の性質(自他、受身、使役等)によりて、其の上にあるべき語を推知せしめ、或は副詞、接續詞及助詞によりて、其の下に來るべき語を推知せしむる様になさざるべからず。

單文の例及其の解剖

- 三四歳なる、かはゆらしき小兒、おもしろげに遊び戯る。
- 父、長子に財産を護る。
- 芋蟲も、毛蟲も、美しき蝶となる。
- 昔、小野篁といふ人ありけり。
- 口は禍の門。
- 此處に塵芥を捨つべからず。
- 正直なる彼をば、世人は、惡しくいひなせり。
- しきしまの大和心は、旭に匂ふ山櫻花の如し。
- 見給へ、帆をあげて走る船を。

主部	叙部	
	主語	述語
修飾語	主語	述語に係る語句
三四歳なる かはゆらしき	小兒	(修) おもしろげに (客) 遊び戯る。
...	汝は	(客) 誰に (客) 其の本を
...	芋蟲も 毛蟲も	(補) 美しき蝶と なる。
...	小野篁といふ 人	(修) 昔 ありけり。
...	口は	(補) 禍の門 (なり)。
...	何人も	(修) 此處に (客) 塵芥を
...	世人は	(補) 正直なる彼をば いひなせり。
...	しきしまの 大和心は	(補) 旭に匂ふ山櫻花の 如し。
...	(君)	(客) 帆をあげて走る船を 見給へ。

複文の例及其の解剖

注 〔複文の中に包含せられたる文は、之を抜き離して更に解剖すべし。〕

一、烈しき風吹けば、あらし浪立つ。

二、君はかの猫の鼠を捕ふるを見たるか。

三、教育の盛なるは、國家の榮ゆる基にこそあれ。

四、友人の京都にあるが、昨日、手紙にて、嵐山の花今見頃なりと、報じ來りぬ。

烈しき風
吹く。

かの猫の鼠を捕ふる。
例(客)

教育の盛なり。
國家の榮也。

友人(修)京都にあり。
嵐山の花(修)今見頃なり。

主部	叙部	述部
一、あらし浪立つ。	烈しき風吹けば	立つ。
二、君は	かの猫の鼠を捕ふるを	見たるか。
三、教育の盛なるは	國家の榮ゆる基にこそ	あれ。
四、友人の京都にあるが	昨日(修)手紙にて	報じ來りぬ。
	(補)嵐山の花今見頃なりと	

重文の例及其の解剖

一、雨降り、風吹く。

二、梅は、植物にして、鶯は動物なり。

三、霜軍營に満ちて、秋氣清し。

四、花は根に、鳥は古巢に歸りけり。

五、徳高き人は世に敬はれ、心いやしきは人に斥けらる。

主部	叙部	述部
一、雨	降り、	吹く。
二、梅は	(補)植物	にして、
三、霜	(修)軍營に	満ちて、
四、花は	(修)根に	(補)歸りけり。
五、徳高き人は	(客)世に	敬せられ、
心いやしき人は	(客)人に	斥けらる。

徳	高し。
心	いやし。

◎文の成分の解剖についての注意

文の成分は通常主語、客語、補語、述語及修飾語とす。されど吾人の思想感情をあらはす所の言語は、必しも盡く文の形式を具ふるものに非るを以て、單語（又は句）が獨立的に用ひらるゝ場合あり。又文中に用ひらるゝも其の成分のいづれにも屬せざることあり。これ等は解剖の際特別の取扱をなすべし。

左に後者の例數個を示す。

總主語	特示語
支那は、人口、多し。 此藥は、芳香、あり。 我軍、士氣、大に振ふ。	博愛、之を仁といふ。 門は、余、之を閉ぢたり。 豐太閤、彼こそ、實に英雄なれ。

呼掛語	接續語	感動語
君よ、君は之を知れるか。 少納言よ、香爐峯の雪はいかに。	山あり、又、川あり。 或は東へゆき、或は、西へゆく。	あはれ、今年も暮れむとす。 我過てり、あゝ。

○右の最初の例に於ける「多し」「あり」「大に振ふ」の述語に對する主語は「人口」「芳香」「士氣」なれども、「支那」「此藥」「我軍」は、各其の下を、述語として其の上に立てる主語と見るを得べし。故に之を總主語と稱するなり。

文の終結 其の一

第一 用言にて終結するもの

○文は、其の叙述語たる用言を以て結ぶを常とし、其の用言は第三段終止形を用ふるを常とす。

○叙述語たる用言を第三段にて結ぶを通常終止法（又は單に終止法）と稱す。而して、叙述語たる用言に係る主語、客語、補足語、修飾語等の下に添意助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」を添へられたる時は第四段連體形にて結び「こそ」を添へられたる時は第五段已然形にて結ぶ。之を連體形終止法、已然形終止法と稱す。

（連體形終止法、已然形終止法となる用言と其の上に係る「ぞ」「なむ」「や」「か」「こそ」等の所謂係りてにはとの關係を係り結びと稱す。）

○疑問文、又は餘意を言外に含めむとする文は、係辭かりてはなくとも連體形終止法にて結ぶことあり。

（餘意を言外に含めむとする文には、又第二段運用形にて結ぶことあれど、普通文には用ひられず。）

○命令文は、多くは用言の命令形を以て結ぶ。之を命令終止法と稱す。

◎ 用言の終止法の例

通常終止法	連體形終止法	已然形終止法	命令形終止法
我、花を折る。	我ぞ花を折る。	我花をこそ折れ。	汝、花を折れ。
人、在り。	人なむ在る。	人こそ在れ。	汝、こゝに在れ。
水、流る。	水や流るゝ。	水こそ流るれ。	水よ、流れよ。
花、落つ。	花か落つる。	花こそ落つれ。	花、落ちよ。
彼、はやく往ぬ。	彼、はやくや往ぬる。	彼こそはやく往ぬれ。	汝、はやく往ぬ。
行、正し。	行ぞ正しき。	行こそ正しけれ。	
行、正しかり。	行ぞ正しかる。	行こそ正しかれ。	行、正しかれ。
我、人に花を折らす。	我、人に、花をぞ折らす。	我、人にこそ花を折らすれ。	汝、人に花を折らせよ。
花、散りにき。	花や散りにし。	花こそ散りにしか。	

○ 係辭なき連體形終止法の例

我こそは、憎くもあらめ。我宿の、花見にだにも吾が来まさぬ。
秋ちかく、野やなりぬらむ。七種の、草の姿の見えわかれぬる。
元日や。神代のことと思はるゝ。
汝は、などこゝに來れる。

文の終結 其の二

第二 用言の下に添意助詞、感歎助詞を連ねて終結するもの

彼は家に歸りきや。
彼は家に歸りしか。
彼は家に歸りしぞ。
汝は家にな歸りぞ。

汝は家に歸るな。
うれしく君に逢ひけるかな。
今一度のみゆき待たなむ。
ふる里の親に見せばや。

第三 一旦終止したる後、更に感歎助詞を添へて終結するもの

思へば悲しきことなりや。
心こそ心をころすものなれや。
うてや。こらせや。
悪しとこそ思ひたれな。

うれしき事なりかし。
斯くぞ覺ゆるかし。
よく思ひ知れかし。
斯くと言はれけるぞかし。

助動詞の所屬意義活用一覽表

△
きハ加變、左變
ニアリテハ下ノ
表ノ如ク附屬ス

左變	加變
爲し	來し
爲し	來し

所屬	意	義	活用	第一段	第二段	第三段	第四段	第五段
四段、奈變、第一。段 及良變の第一。段	る	受身 (可能、自然動)	下二段	れ	れ	る	る、	るれ
右の外の第一。段	らる	受身 (可能、自然動)	下二段	られ	られ	らる	らる、	らるれ
四段、奈變、第一。段 及良變の第一。段	す	使役 (尊敬)	下二段	せ	せ	す	する	すれ
右の外の第一。段	さす	使役 (尊敬)	下二段	させ	させ	さす	さする	さすれ
第一。段	しむ	使役 (尊敬)	下二段	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ
第一。段	ず	打消	雑活	ず	ず	ず	ぬ	ね
第一。段	ざり	打消	良變	ざら	ざり	(ざり)	ざる	ざれ
第一。段	じ	打消推量 (打消未來)	雑活			じ	(じ)	(じ)
第一。段	む	未來 (推量、假定)	雑活			む	む	め
第一。段	まし	假定推量	雑活	(ませ)		まし	まし	まし
第一。段	まほし	希望	志久活	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ
第一。段	たし	希望	久活	たく	たく	たし	たき	たけれ
第一。段	つ	完了	下二段	て	て	つ	つる	つれ
第一。段	ぬ	完了	奈變	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ
第一。段	たり	完了 (完了存續)	良變	たら	たり	たり	たる	たれ
第一。段	き	過去 (過去存續、詠歎)	雑活	(せ)		き	し	しか
第一。段	けり	過去 (過去存續、詠歎)	良變	(けら)	(けり)	けり	ける	けれ
第一。段	けむ	過去推量	雑活			けむ	けむ	けめ
第一。段	らむ	推量	雑活			らむ	らむ	らめ
第一。段	べし	推量 (未來、可能、許容、義務、命令)	久活	べく	べく	べし	べき	べけれ
第一。段	べかり	推量	良變	べから	べかり	べかり	べかる	べかれ
第一。段	めり	推量	不完全		(めり)	めり	める	めれ
第一。段	らし	推量	良變			らし	(らし)	(らし)
第一。段	まじ	打消推量 (打消未來、打消義務)	志久活	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ
第一。段	なり	詠歎推量	不完全			なり	なる	なれ
第一。段	なり	指定	良變	なら	なり	なり	なる	なれ
第一。段	ごとし	比較	久活	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	(ごとき)
第一。段	り	完了 (完了存續)	良變	(ら)	(り)	り	る	れ

左變	加變
爲 せ し し か	來 き し し か
爲 し き	來 き し し か

活用		意義		意		段		段		段		段		段		五段	
第一段	第二段	第三段	第四段	第五段	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	受身	受身	受身	受身	受身	受身	受身
る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る
れ	れ	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る
られ	られ	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる	らる
せ	せ	す	する	すれ	せ	す	する	すれ	せ	す	する	すれ	せ	す	する	すれ	せ
しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ
ず	ず	ぬ	ぬ	ぬ	ず	ぬ	ぬ	ぬ	ず	ぬ	ぬ	ぬ	ず	ぬ	ぬ	ぬ	ず
ざら	ざら	ざる	ざる	ざる	ざら	ざる	ざる	ざる	ざら	ざる	ざる	ざる	ざら	ざる	ざる	ざる	ざら
まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし
たし	たし	たき	たき	たき	たし	たき	たき	たき	たし	たき	たき	たき	たし	たき	たき	たき	たし
たり	たり	たる	たる	たる	たり	たる	たる	たる	たり	たる	たる	たる	たり	たる	たる	たる	たり
き	き	しか	しか	しか	き	しか	しか	しか	き	しか	しか	しか	き	しか	しか	しか	き
けり	けり	ける	ける	ける	けり	ける	ける	ける	けり	ける	ける	ける	けり	ける	ける	ける	けり
けむ	けむ	けむ	けむ	けむ	けむ	けむ	けむ	けむ	けむ	けむ	けむ	けむ	けむ	けむ	けむ	けむ	けむ
らむ	らむ	らむ	らむ	らむ	らむ	らむ	らむ	らむ	らむ	らむ	らむ	らむ	らむ	らむ	らむ	らむ	らむ
べし	べし	べき	べき	べき	べし	べき	べき	べき	べし	べき	べき	べき	べし	べき	べき	べき	べし
べかり	べかり	べかる	べかる	べかる	べかり	べかる	べかる	べかる	べかり	べかる	べかる	べかる	べかり	べかる	べかる	べかる	べかり
めり	めり	める	める	める	めり	める	める	める	めり	める	める	める	めり	める	める	める	めり
らし	らし	(らし)	(らし)	(らし)	らし	(らし)	(らし)	(らし)	らし	(らし)	(らし)	(らし)	らし	(らし)	(らし)	(らし)	らし
まじ	まじ	まじき	まじき	まじき	まじ	まじき	まじき	まじき	まじ	まじき	まじき	まじき	まじ	まじき	まじき	まじき	まじ
なり	なり	なる	なる	なる	なり	なる	なる	なる	なり	なる	なる	なる	なり	なる	なる	なる	なり
なり	なり	なれ	なれ	なれ	なり	なれ	なれ	なれ	なり	なれ	なれ	なれ	なり	なれ	なれ	なれ	なり
ごとし	ごとし	ごとき	ごとき	ごとき	ごとし	ごとき	ごとき	ごとき	ごとし	ごとき	ごとき	ごとき	ごとし	ごとき	ごとき	ごとき	ごとし
り	り	る	る	る	り	る	る	る	り	る	る	る	り	る	る	る	り

注 表中に謂へる體言は、用言の連體形を始め、其他體言し
 扱はるゝ語句を總括したるものと知るべし

類		關		係		助		詞		接		續		助		詞		添		意		助		詞		感		助		詞		類								
所	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言	體言								
と……と	が、の、	が、の、	を、	に、	と、	へ、	より、	から、	まて、	ば、	ど、ども、	とも、	に、を、	が、も、	て、	て、	つ、い、	ながら、	は、(は)	も、	ぞ、	なむ、し、	や、(やは)	か、(かは)	こそ、	さへ、だに、	すら、	のみ、	ばかり、	な……そ	な、	や、	よ、	も、	は、(はや、はも)	か、(かな、かも)	な、かし、	なむ、ばや、	動詞の第一段	も、しに、し、等、の、媒、介、によりて、體言、及、動詞、の、第二、段、につ、く、
上下ノ體言同列ノ關係ヲモツ(月と花と。喜びと悲しみと。明るくと暮るゝと)	上ナル體言ガ下ナル體言ヲ限定ス(君ガ世。櫻の花。重きが上。恨めしの心)	主語タル體言ト述語タル用言トヲ密着セシム(秋風の吹く。智無きが多し)	上ナル體言ガ下ナル用言ノ目的ヲ表ス(水を飲む)又場所ヲ表ス(庭を歩む)	上ナル體言ガ下ナル用言ノ場所ヲ表シ(机に載す)間接ノ目的ヲ表シ(人に與ふ)所山ヲ表に苦む)指定物ヲ表シ(石になる)比較物ヲ表ス(人に劣る)	上ナル體言ガ下ナル用言ノ指定物ヲ表シ(それと思ふ)共ニスル者ヲ表ス(友と遊ぶ)	上ナル體言ガ下ナル用言ノ動作ノ方向ヲ表ス(前へ進む)	上ナル體言ガ下ナル用言ノ動作ノ起點ヲ表シ(東京より立つ)經過スル所ヲ表ス(海道から)	上ナル體言ガ下ナル用言ノ動作ノ高し(山より高し。犬より劣る)	上ナル體言ガ下ナル用言ノ動作ノ到着點ヲ表ス(大阪までゆく。斃るゝまで活動す)	甲乙ノ語句ヲ接續シテ乙ノ事項ガ甲ノ事項ニ起因シテ起ルヲ示ス。而シテ用言ノ第一段ルトキハ甲ノ事項ガ未定ハ假定ナルヲ示シ第五段ニ屬スルトキハ既定又ハ確定ナル(風吹けば浪立つ。風吹けば浪立たむ)○又乙ノ事項ガ甲ノ事項ニ伴フ豫想ニ適合スルヲ示ス(を訪へば家に居たり)	甲乙ノ語句ヲ接續シテ乙ノ事項ガ甲ノ事項ニ伴フ豫想ニ反對スル意ヲ示ス。而シテど、甲ノ事項ガ既定又ハ確定ナルヲ示シともハ未定又ハ假定ナルヲ示ス(風吹けど浪立たずとも浪立たじ)	甲乙ノ語句ヲ接續シテ乙ノ事項ガ甲ノ事項ニ伴フ豫想ニ適合セザルヲ示ス(彼を訪ひし居らざりき)○又豫想ノ外レザルヲ示スコトアリ(彼を訪ひしに家に居たりき)	甲乙ノ語句ヲ接續シテ乙ノ事項ガ甲ノ事項ニツギテ起ルヲ示ス(春過ぎて夏来る)○又甲乙ノ並立セルヲ示ス(山聳えて川深し)	甲ノ事項ヲ打消シテ乙ノ事項ニ接續ス(退はで歸る)	甲乙ノ語句ヲ接續シテ二ツノ事項ガ相互ニ並行スルヲ示ス(書を讀みつゝ字を書く。歩ら見る)○又どもノ意ヲ成ス(知りつゝ行はす。思ひながら訪はす)	差別ノ意(花は赤く葉は青し)○單ニ取リ立テ、イフ意(鯨は獸なり)○音便ニテ濁ルコト意ハ同じ(酒をば飲まず。往かすばあるべからず)	一致ノ意(野にも山にも咲く。善くもなく悪くもなし)	ぞ、なむ共ニ特ニ指ス意。但シなむハ意稍緩シ(花ぞ咲きける。敵見えたるぞ。人をなむ想○ぞ、なむ共ニ連體形終止ノ係辭トナル。	しモ上ノ語ヲ指ス意(神し知らなむ。今し散るらむ)	疑ヒ又ハ問フ意。而シテ何、誰、幾、如何ナドノ疑語ヲ用フル文ニハカヲ用ヒテヤヲ用ヒナリ(人や來れる。彼は來れりや。誰か來れる。何時來れるか)○やか共ニ事情ニヨリテ意顯リテ確定トナル。所謂反語是ナリ(亦悦しからずや。誰かは知らむ)○やか共ニ連體ノ係辭トナル○やは、かはは多クハ反語ニ用フ。	他ヲ捨テ、一ヲ取ル意(今日こそゆかめ)○こそハ已然形終止ノ係辭トナル。	さへハアルガ上ニ添ヒ加ハル意。口語までも(雨降り風さへ吹く)だに、すらハ輕キヲ示シ重キヲ悟ラシム。口語さえでも、やはり(十分の)にたに及はす。黙すら思を知る)	一ツニ限り、其レニ専ラナル意(梅ばかりを植う。君をのみ思ふ)	禁止ノ意(枝をな折りそ。此處へな來そ。油斷をな爲そ)	(枝を折るな此處へ來な油斷を爲な。御油斷有るな)	呼掛(蝶や。花や)感歎(面白の景色や。さぞやよからむ。あさましや。さきざきりす鳴くや箱根のますらを暇あれや。いざ歌へや)	呼掛(少納言よ)感歎(心細さよ。思はずよ。老いにけるよな。鳴けよ)	感歎(時しもあれ。いと畏し。さても面白し。移りもゆくか人の心の。知らずもあるや。くへ知らずも)	感歎(吾妻はや。父君もおはしたるは。是に於てか始る。出でし月かも。招くか野べのき。あゝ悲しかな。年を歷るかな)	咏歎。但シかしハ念を推ス意アリ(移りにけりな。うれしきことなりかし。思ひ知れかし。希望。但シなむハ詠ノ場合ニ用フ(今一たびのみゆき待たなむ。人に見せばや。老いす死藥もが。往き見てしがな。世の中は常にがもな)										

注 意 表中に謂へる體言は、用言の連體形を始め、其他體言として扱はるゝ語句を總括したるものと知るべし

所屬		體言と用言との間		用言の間		言の間の		上の置くに用言は第四段第二(段)		上の置くに用言は第三段第一(段)		上の置くに用言は第二段第一(段)		上の置くに用言は第一段第一(段)			
意		義		(用例)													
と……と	上下ノ體言同列ノ關係ヲモツ(月と花と。喜びと悲しみと。明くる日暮るゝと)			が、の、	上ナル體言ガ下ナル體言ヲ限定ス(君が世。櫻の花。重きが上。恨めしの心)			なむ、し、	疑ひ又ハ問フ意。而シテ何、誰、幾、如何ナドノ疑語ヲ用フル文ニハカヲ用ヒテヤヲ用ヒザル例ナリ(人や來れる。彼は來れりや。誰か來れる。何時來れるか)○やか共ニ事情ニヨリテハ疑ノ意離リテ確定トナル。所謂反語是ナリ(亦悦しからずや。誰かは知らむ)○やか共ニ連體形終止ノ係辭トナル○やは、かはは多クハ反語ニ用フ。			なむ、し、	疑ひ又ハ問フ意。而シテ何、誰、幾、如何ナドノ疑語ヲ用フル文ニハカヲ用ヒテヤヲ用ヒザル例ナリ(人や來れる。彼は來れりや。誰か來れる。何時來れるか)○やか共ニ事情ニヨリテハ疑ノ意離リテ確定トナル。所謂反語是ナリ(亦悦しからずや。誰かは知らむ)○やか共ニ連體形終止ノ係辭トナル○やは、かはは多クハ反語ニ用フ。			なむ、し、	疑ひ又ハ問フ意。而シテ何、誰、幾、如何ナドノ疑語ヲ用フル文ニハカヲ用ヒテヤヲ用ヒザル例ナリ(人や來れる。彼は來れりや。誰か來れる。何時來れるか)○やか共ニ事情ニヨリテハ疑ノ意離リテ確定トナル。所謂反語是ナリ(亦悦しからずや。誰かは知らむ)○やか共ニ連體形終止ノ係辭トナル○やは、かはは多クハ反語ニ用フ。
が、の、	主語タル體言ト述語タル用言トヲ密着セシム(秋風の吹く。智無さが多し)			を、	上ナル體言ガ下ナル用言ノ目的ヲ表ス(水を飲む)又場所ヲ表ス(庭を歩む)			ぞ、	ぞ、なむ共ニ特ニ指ス意。但シなむハ意稍緩シ(花ぞ咲きける。敵見えたるぞ。人をなむ恨むる)○ぞ、なむ共ニ連體形終止ノ係辭トナル。 しモ上ノ語ヲ指ス意(神し知らなむ。今し散らむ)			ぞ、	ぞ、なむ共ニ特ニ指ス意。但シなむハ意稍緩シ(花ぞ咲きける。敵見えたるぞ。人をなむ恨むる)○ぞ、なむ共ニ連體形終止ノ係辭トナル。 しモ上ノ語ヲ指ス意(神し知らなむ。今し散らむ)			ぞ、	ぞ、なむ共ニ特ニ指ス意。但シなむハ意稍緩シ(花ぞ咲きける。敵見えたるぞ。人をなむ恨むる)○ぞ、なむ共ニ連體形終止ノ係辭トナル。 しモ上ノ語ヲ指ス意(神し知らなむ。今し散らむ)
に、を、	上ナル體言ガ下ナル用言ノ動作ノ方向ヲ表ス(前へ進む)			より、	上ナル體言ガ下ナル用言ノ動作ノ起點ヲ表シ(東京より立つ)經過スル所ヲ表ス(海道から行く)○よりハ又比較物ヲ表ス(山より高し。犬より劣る)			も、	一致ノ意(野にも山にも咲く。善くもなく悪くもなし) ぞ、なむ共ニ特ニ指ス意。但シなむハ意稍緩シ(花ぞ咲きける。敵見えたるぞ。人をなむ恨むる)○ぞ、なむ共ニ連體形終止ノ係辭トナル。 しモ上ノ語ヲ指ス意(神し知らなむ。今し散らむ)			も、	一致ノ意(野にも山にも咲く。善くもなく悪くもなし) ぞ、なむ共ニ特ニ指ス意。但シなむハ意稍緩シ(花ぞ咲きける。敵見えたるぞ。人をなむ恨むる)○ぞ、なむ共ニ連體形終止ノ係辭トナル。 しモ上ノ語ヲ指ス意(神し知らなむ。今し散らむ)			も、	一致ノ意(野にも山にも咲く。善くもなく悪くもなし) ぞ、なむ共ニ特ニ指ス意。但シなむハ意稍緩シ(花ぞ咲きける。敵見えたるぞ。人をなむ恨むる)○ぞ、なむ共ニ連體形終止ノ係辭トナル。 しモ上ノ語ヲ指ス意(神し知らなむ。今し散らむ)
へ、	上ナル體言ガ下ナル用言ノ動作ノ方向ヲ表ス(前へ進む)			から、	上ナル體言ガ下ナル用言ノ動作ノ起點ヲ表シ(東京より立つ)經過スル所ヲ表ス(海道から行く)○よりハ又比較物ヲ表ス(山より高し。犬より劣る)			ば、	甲乙ノ語句ヲ接續シテ乙ノ事項ガ甲ノ事項ニ伴フ豫想ニ適合セザルヲ示ス(彼を訪ひしに家に居らざりき)○又豫想ノ外レザルヲ示スコトアリ(彼を訪ひしに家に居たりき)			ば、	甲乙ノ語句ヲ接續シテ乙ノ事項ガ甲ノ事項ニ伴フ豫想ニ適合セザルヲ示ス(彼を訪ひしに家に居らざりき)○又豫想ノ外レザルヲ示スコトアリ(彼を訪ひしに家に居たりき)			ば、	甲乙ノ語句ヲ接續シテ乙ノ事項ガ甲ノ事項ニ伴フ豫想ニ適合セザルヲ示ス(彼を訪ひしに家に居らざりき)○又豫想ノ外レザルヲ示スコトアリ(彼を訪ひしに家に居たりき)
まて、	上ナル體言ガ下ナル用言ノ動作ノ起點ヲ表シ(東京より立つ)經過スル所ヲ表ス(海道から行く)○よりハ又比較物ヲ表ス(山より高し。犬より劣る)			とも、	甲乙ノ語句ヲ接續シテ乙ノ事項ガ甲ノ事項ニ伴フ豫想ニ適合セザルヲ示ス(風吹けど浪立たず。風吹くと浪立たじ)			ど、ども、	甲乙ノ語句ヲ接續シテ乙ノ事項ガ甲ノ事項ニ伴フ豫想ニ適合セザルヲ示ス(風吹けど浪立たず。風吹くと浪立たじ)			ど、ども、	甲乙ノ語句ヲ接續シテ乙ノ事項ガ甲ノ事項ニ伴フ豫想ニ適合セザルヲ示ス(風吹けど浪立たず。風吹くと浪立たじ)			ど、ども、	甲乙ノ語句ヲ接續シテ乙ノ事項ガ甲ノ事項ニ伴フ豫想ニ適合セザルヲ示ス(風吹けど浪立たず。風吹くと浪立たじ)
と、	上ナル體言ガ下ナル用言ノ指定物ヲ表シ(それと思ふ)共ニスル者ヲ表ス(友と遊ぶ)			に、を、	甲乙ノ語句ヲ接續シテ乙ノ事項ガ甲ノ事項ニ伴フ豫想ニ適合セザルヲ示ス(風吹けど浪立たず。風吹くと浪立たじ)			で、	甲乙ノ語句ヲ接續シテ乙ノ事項ガ甲ノ事項ニ伴フ豫想ニ適合セザルヲ示ス(春過ぎて夏来る)○又甲乙ノ事項ノ並立セルヲ示ス(山聳えて川深し)			で、	甲乙ノ語句ヲ接續シテ乙ノ事項ガ甲ノ事項ニ伴フ豫想ニ適合セザルヲ示ス(春過ぎて夏来る)○又甲乙ノ事項ノ並立セルヲ示ス(山聳えて川深し)			で、	甲乙ノ語句ヲ接續シテ乙ノ事項ガ甲ノ事項ニ伴フ豫想ニ適合セザルヲ示ス(春過ぎて夏来る)○又甲乙ノ事項ノ並立セルヲ示ス(山聳えて川深し)
より、	上ナル體言ガ下ナル用言ノ動作ノ起點ヲ表シ(東京より立つ)經過スル所ヲ表ス(海道から行く)○よりハ又比較物ヲ表ス(山より高し。犬より劣る)			が、の、	甲乙ノ語句ヲ接續シテ乙ノ事項ガ相互ニ並行スルヲ示ス(書を読みつゝ字を書く。歩みながら見る)○又どもノ意ヲ成ス(知りつゝ行はず。思ひながら訪はず)			は、(は)、	差別ノ意(花は赤く葉は青し)○單ニ取り立て、イフ意(鯨は獸なり)○音便ニテ濁ルコトアレド意ハ同じ(酒をば飲ます。往かずばあるべからず)			は、(は)、	差別ノ意(花は赤く葉は青し)○單ニ取り立て、イフ意(鯨は獸なり)○音便ニテ濁ルコトアレド意ハ同じ(酒をば飲ます。往かずばあるべからず)			は、(は)、	差別ノ意(花は赤く葉は青し)○單ニ取り立て、イフ意(鯨は獸なり)○音便ニテ濁ルコトアレド意ハ同じ(酒をば飲ます。往かずばあるべからず)
は、(は)、	差別ノ意(花は赤く葉は青し)○單ニ取り立て、イフ意(鯨は獸なり)○音便ニテ濁ルコトアレド意ハ同じ(酒をば飲ます。往かずばあるべからず)			は、(は)、	差別ノ意(花は赤く葉は青し)○單ニ取り立て、イフ意(鯨は獸なり)○音便ニテ濁ルコトアレド意ハ同じ(酒をば飲ます。往かずばあるべからず)			は、(は)、	差別ノ意(花は赤く葉は青し)○單ニ取り立て、イフ意(鯨は獸なり)○音便ニテ濁ルコトアレド意ハ同じ(酒をば飲ます。往かずばあるべからず)			は、(は)、	差別ノ意(花は赤く葉は青し)○單ニ取り立て、イフ意(鯨は獸なり)○音便ニテ濁ルコトアレド意ハ同じ(酒をば飲ます。往かずばあるべからず)			は、(は)、	差別ノ意(花は赤く葉は青し)○單ニ取り立て、イフ意(鯨は獸なり)○音便ニテ濁ルコトアレド意ハ同じ(酒をば飲ます。往かずばあるべからず)

234
169

K20.8

明治四十四年六月一日印刷
明治四十四年六月十五日發行

定價金貳拾五錢

不許
複製

著者

國語教授法研究會

兼發行
兼印刷者

虎谷喜太郎

東京麹町區元園町一丁目四十番地

發行所

虎谷誠堂
大塚
虎谷誠堂

